

検査の知識

～尿検査～

検査は、高度な検査機器の登場などにより、最近非常に進歩してきました。そのため、昔では見落とされていたようなことも、今では詳細に分かるようになりました。今回は尿検査について、どのようなことが分かるのかを簡単に説明しましょう。



尿検査は、体の状態を知る重要な手がかりです。尿検査は検体の採取が容易ですので患者さんにとって負担が少なく、結果もすぐ得られますので、行なう頻度の高い検査です。方法は、尿の中に試験紙を浸して色調の変化をみる試験紙法が一般的です。

【尿タンパク】

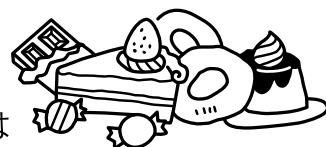
尿の中にタンパクが含まれていないかを調べる検査で、腎臓の病気を見つけるのに大切です。正常値はマイナス(でてない)です。プラス(でている)の時は腎臓の病気などが考えられます。しかし、健康な人でも1日100mg前後くらいは尿にでます。激しい運動をしたりストレスや熱い風呂、また生理前にも尿中にタンパクが出るので、検査でプラスと出ても、それだけで腎臓病だと決めつけることは出来ません。代表的な腎臓病の一つであるネフローゼ症候群では、タンパクが1日に3.5g以上も尿にでます。



【尿糖】

尿の中の糖を検査するもので、糖尿病を見つけるのに大切です。

正常値はマイナスです。必ずしも尿糖=糖尿病と言うことではありませんが、プラスで血糖値も高い人は糖尿病が考えられます。逆にプラスでも血糖値は高くない人は、腎性糖尿といって腎臓の働きが落ちていることなどが考えられます。また、プラスでも病気でない場合も考えられます。例えば、甘いものを食べたり、激しい運動をした時、妊娠している時にも一時的に尿の中に糖が出ることがあります。



【 潜 血 】

尿に血(赤血球)が混じっているかを調べる検査です。尿の通り道である臓器(腎臓や尿管、膀胱など)に異常があると、尿に赤血球が混じることがあります。正常値はマイナスです。尿中の赤血球成分を試験紙で調べ、プラスの場合は腎疾患、尿路結石、尿路感染症、出血性疾患などが考えられます。尿に多くの血が混じると、検査でなくてもトイレで尿の色をみただけで分かることもあります。症状によっては若干色が異なりますが、紅茶の様に薄い茶色から、コーヒーの様に濃い茶褐色をしています。ただし、服用中のお薬によっても尿に色が着くことがあります。例えば、総合ビタミン剤や栄養ドリンク剤の中に必ずと言っていいほど含まれている



ビタミンB₂によって、尿の色が黄色になることがあります。尿の色の変化が薬によるものかどうか分からないときは、医師または薬剤師に相談してみましょう。

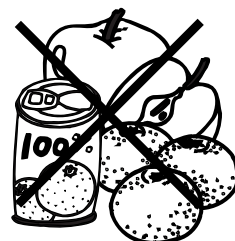


正しく検査を受けるために気をつけていたいこと

- 尿の出始めと終わりはそのまま便器に流して、「中間尿」を採ることが原則です。



これを検査用コップ(200ml)に3分に1から半分くらい入れます。特に、女性の場合は間違った検査結果が出ないためにも、提出する尿に雑菌が入らないように、陰部を清潔にすることを心がけましょう。生理中や生理後1~2日は検査を避ける事が望ましいのですが、必要な場合はその旨を医師や検査技師に伝えましょう。また、ビタミンCを多量に服用すると、糖や潜血の検査が不正確になることがあります。前日からビタミンCを多量に含む食べ物や飲み物は控えましょう。



- 尿の中には病気の状態を知る情報がたくさん入っていますので、洋の東西を問わず、昔から『尿は診断の門』と言われてきました。
- 尿検査は今までほとんどの人が体験していると思いますが、尿から正しい情報を得るために正しい尿の取り方に心がけましょう。